

輪唱

梅崎春生

附やぶちゃん注

「やぶちゃん注」本作は昭和二三（一九四八）年九月号『文芸』に掲載された「いなびかり」「猫の話」「午砲」の三篇から構成されたアンソロジー「輪唱」の全篇である（因みに、第三篇の「午砲」は、私の所持する以下に示す全集には標題及び文中でもルビが打たれていないが、一般にはこれで「ドン」と当て読みする読みが通行している。「輪唱」全体は後に単行本「B島風物誌」（同昭和二三（一九四七）年十二月河出書房刊）に所収された。底本は昭和五九（一九八四）年沖積舎刊「梅崎春生全集 第三卷」を用いた。傍点「ヽ」はブログ版では太字に代えた。 藪野直史」

輪 唱

いなびかり

おじいさんはだんだんに口を利きかなくなつた。それは歯が抜けているせいでもあつたが、でもしゃべろうと思えば、まだしゃべることはできた。発音がすこし不明瞭になるだけであつた。

しゃべりたくなると、おじいさんはひとり言をいった。しかしよく聞くと、それはひとり言ではなくて、なにかに話しかけているのであつた。話し相手は、そのときどきによつて、壁であつたり、電熱器であつたり、自分がぎざんでいる仏像であつたりした。おじいさんは実際に、ひとり言のなかで、話している相手の物品に、さんづけでよびかけたりしたのである。だからおばあさんは、聴き耳をたてるまでもなく、おじいさんが今なにに話しかけているか知ることができた。しかしそんな時でも、おばあさんはすこし仏頂づらしたまま、聞えないふりをしていた。おばあさんは、耳はもちろん、眼も歯も、わかい娘のようにたっしやであつた。

この数年来、おじいさんとおばあさんは、ほとんど口を利き合わなかつた。二三年前までは、おじいさんも、寒いから窓をしめなさいとか、このおかずはまずいとか、短い言葉を言うこともあつたけれども、ちかごろではそれも言わなくなつた。おじいさんがものを言わないから、自然とおばあさんも、家のなかでは口を利かなくなつた。しかしおばあさんは、しゃべりたくなると、近所にでかけて行って、よそのおかみさんとおしゃべりをしてきた。

昼のあいだ、おじいさんはモク拾いに出かけた。おじいさんは若いときから、仏師とし

て生活していたが、ちかごろでは注文が絶えてないのであった。注文がなければたちまち生活にこまるので、払い下げ品の軍隊ゲートルを脚にまいて、おじいさんは毎朝モク拾いに出かけていった。そして一日中、道路や公園や駅をあるき廻った。おじいさんは駅がいちばん好きであった。収穫が多いというせいもあったが、また何となく好きなのであった。夕方になると、手にさげた信玄袋に煙草の吸いさしをいっぱい入れて、くたびれた姿勢になつて戻つてきた。弁当をもつて行かないから、おなかはぺこぺこの筈であった。

おじいさんは歯が弱かったが、おばあさんは丈夫なので、肉が大好きであった。けれども貧乏なので、安い鯨肉しか買えなかった。鯨肉でもそのつもりで食えば、牛肉のような味がした。鯨が出盛りになると、おばあさんは毎日それを買つてきた。おばあさんは元氣よく食べたけれども、おじいさんはひどく努力してそれを食べた。別に不平も言わなかった。おじいさんの食事はながいことかかったが、おばあさんは先にさつさと済ませて、夜なべの準備にとりかかった。おばあさんの夜なべというのは、おじいさんが持ち帰った煙草の吸いさしをほぐして、新しい巻煙草に再生することであった。

おじいさんは食事がすむと、ひっそりと板の間におりて行つた。ここがおじいさんの仕事場になつていた。そこに坐るとおじいさんの顔は、俄かにがっくりと年とつたように見えた。仕事にかかる前に、おじいさんは彫りかけの仏像をしばらくながめたり、の、みをとつて刃先をながいこと光に透したりした。

「今日も、モク拾いに、行つてきましたよ。ノミさん」

衰えた声でそんなことを呟つぶやいたりした。おじいさんの顔には、疲労がみなぎつていて、彫りかけた仏像のつやつやした顔と、いい対照を示していた。

長い吸いさしや短い吸いさし、曲つた吸いさしや口紅のついた吸いさし、おばあさんは丹念に解きほぐして、ごちゃごちゃにすると、こんどは手巻器械をカチャカチャ言わせて、一本一本巻いて行つた。その音のあいだに、おじいさんがの、みをあてる音が混つた。の、みの音はにぶく間遠であった。くらい電燈のひかりが、そこにしずかに落ちていた。おばあさんはそちらをちらちら見ながら、指を正確にうごかして、器械をカチャカチャ鳴らした。

（おじいさんは仏師のくせに、うちには仏壇もないんだよ！）

おばあさんはそんなことを考えたりした。そしておじいさんが若いころ女好きで、それで苦労したことなどを思い出したりした。その頃からこの家には、仏壇がなかった。しかしいま暗い板の間に坐っているおじいさんの姿は、そのころと別人のようにしなびていた。十時ごろになると、巻き終えた煙草をひとまとめにして、おばあさんは立ちあがりバンバタンと乱暴に夜具をしいた。その音にびっくりしたようにおじいさんは顔を上げるのであった。あたりの木屑を整理すると、自分もたちあがつて夜具をしいた。そしてふたり

とも、だまって別々に寝た。

夜中におばあさんが眼をさますと、いつもおじいさんは片頬に、うすら笑いをうかべて眠っていた。

ある日おじいさんは、いつものようにゲートルをまいて、小刻みに脚をうごかしながら、駅の方へあるいて行った。手には信玄袋をぶらぶらさせていた。切符を買って歩廊に入ると、すこし前屈みになって、吸いさしをみつけると、手をのぼして拾いあげ、大事そうに信玄袋におさめた。それから煙草をくわえている男をみつけると、すこし遠くから、じつと見守っていた。煙草を捨てるのを待っているのであった。そんなときのおじいさんの顔は、すこしゆるんで、にこにこしているように見えた。男が捨てる時、すぐ近づいてそれを拾いあげ、また他の男の方へあるいて行った。おじいさんはやせているので、ゲートルを巻いた脚は細い竹の筒みたいだった。

そのころおばあさんは街角で、昨夜まいた手巻煙草をうりつくし、マーケットから赤黒い鯨肉をひとかたまり買って戻ってきた。それを台所におくと、おとなりの糊屋のおばあさんのところへおしゃべりに行った。

しばらくすると台所にやせたぶち猫がおずおずと入ってきた。あたりを見廻して台所にあがり、流しのぎるに伏せた鯨肉を、歯ですこしずつ千切って、にちやにちやと食べた。歯に肉がひつかかるらしく、ときどき前脚をあげて踊るような恰好をした。そのたびに流し板がかたかたと鳴った。鯨肉はすこしずつ食いちぎられ、不規則な形に歯跡がのこされて行った。猫の腹はしだいにぼったりふくらんできた。すると表の方からあしおと登音が近づいてきたので、猫はぎよつとしたように首をあげた。……

「あのじい。おれが煙草すてるのを待ってやがる」

派手なアロハシャツを着た青年が、駅の歩廊で、連れの男にそう言った。そしていまいましように吸いかけの煙草を、おじいさんの方へピンと弾きとばした。煙草はあかい線となっておじいさんの足もとにとんだ。

そのとたんに、おじいさんは二尺ばかり飛びあがった。煙草の火がゲートルのほぐれたところにもぐりこんで、ぶかぶかの地下足袋のなかにおちこんだのである。おじいさんは真赤な顔になって、やつ、ほう、と変な叫びをたてて、片足をびよんびよんさせた。

夕方になっておじいさんはとぼとぼと家に戻ってきた。暗い空からは、今にも雨が落ちてきそうであった。おじいさんはかすかにびっこを引いていて、はなはだしく疲労しているように見えた。

台所には鯨肉を煮る匂いがしていた。かまどの前では、おばあさんが仏頂づらをして、しきりに火吹竹をふいていた。

やがて夕食が終えたころ、屋根の上で雨のおとがぼつりぼつりと鳴った。そしてそれはだんだんひどくなった。

部屋のすみではおばあさんが信玄袋をひらいたら、吸いがらはいつもの半分ぐらいしかなかった。おばあさんはとがめるような眼付になって、おじいさんの方を見た。おじいさんは大きな耳をひくひくと動かし、奥歯でしきりに鯨肉を齧んでいた。おばあさんはかなしいような、あきらめたような表情になって、吸いがらをざらざらと畳にこぼした。

(ほんものの牛肉を、いっぺん腹いっぱい食べたいな)

おばあさんは気をまぎらすように、そんなことをかながえた。へんな猫に鯨肉を半分も食われたことを、まだおばあさんは腹を立てているのであった。しかし火吹竹で猫の横面を力いっぱいなぐりつけたとき、猫がよろめきながら、燃えるようなかなしい眼付をしたことを思いだすと、やはりおばあさんの胸にも物悲しい気持がひろがってきた。

茶碗をかたづけると、おじいさんはひっそりと板の間におりて行った。そしていつものところに坐った。内側にまげた足先に、あかく火ぶくれができてきているのが、暗い電燈の光でもはつきり見えた。おじいさんは顔をあげ、雨の音をききながら、ぼんやり壁にかかった雨合羽をながめていた。明日も雨だとすると、吸いがらは濡れてしまうから、出かける必要はないわけであった。おじいさんは奥歯をなおすり合わせて、はさまった鯨肉の一片をかんだ。今日のも、やはり堅い肉であった。しかし今夜ほど、齧むのに骨の折れたことは、今までにあまりなかった。齧んでいるだけで、体力が尽きてしまいそうな気がした。

「雨合羽さん。雨合羽さん」おじいさんは口の中でもぐもぐと呼びかけた。「この四五年に、わたしは鯨を一匹はたべましたよ」

吸いがらをほぐす手をやめて、おばあさんはきらっと眼をひからせた。おじいさんはのみをとりあげながら、うつむいたまま、ぼんやりわらっているのであった。不気味なかけが、おじいさんの額におちていた。その前には、半分ほど出来かけた仏像が、背をそらして立っていた。この仏像に、おじいさんは二箇月もかかっているのであった。

窓のそとを、ときどき青白く稲妻がはしった。おじいさんの背後には、でき上った小さな仏像が、壁を背にしていくつもならんでいた。翳かげをふかめて鎮もっている仏像たちが、稲妻の青い光にとっぜん浮び上った。仏像たちは微妙な光を全身にたたえていて、まるで生きて歩きだしそうに見えた。しかし稲妻がきえると、それらはまた壁の暗がりにはずんで行った。

「やぶちゃん注」：「払い下げ品の軍隊ゲートル」「ゲートル」はフランス語 *g uêtres* で本来は、革・ズック・ラシャなどで作った長靴のような洋風脚絆を一般には指すが、これは当時の闇市で売られた、負けた日本軍の「払い下げ品」である軍装の一つの、「巻脚絆（まききやはん）」「巻きゲートル」のことである。兵士の行軍中の脛を保護する目的の外、ズボンの裾が周囲の物に捲きついたりしないように押さえ、長時間の行軍の際には下肢を締めつけることで鬱血を防ぎ、脚の疲労を軽減するなどの目的を持っていた。「巻脚絆」とは包帯状の細い布を巻いて脚絆とするタイプのゲートルで、参照した[ウィキの「脚絆」](#)によれば、『世界の軍隊の軍装品としては第一次世界大戦をピークに、第二次世界大戦頃まではレギンス型や長靴とともに各国の軍隊で広く用いられた。脚絆の一端には脚絆を最後に固定するための紐が取り付けられている。欠点としては、上手に巻くには慣れが必要で時間がかかり、高温多湿の環境下ではシラミなど害虫の温床になりやすい。第二次大戦後に編上げ式の半長靴が普及するにつれてとって代わられ』、民間使用としては『第二次大戦頃までは軍隊と同様に広く普及していたが、現代ではほぼ廃れている』。日本陸軍では『日露戦争中に採用され、日露戦後に徒歩本分者の被服とされた。数種類の巻き方があり、いったん巻いた脚絆の上下（足首と膝下）を固定用の紐でさらに締め、紐がすねの前で交差する巻き方は「戦鬨巻」と俗称された』。日本海軍では当初は陸戦装備として一九三〇年代（昭和五〜一五年）に『士官下士官兵共通の被服として採用され（陸戦隊被服）、艦船勤務の将兵であっても広く普及していた』とある。闇市は昭和二四（一九四九）年のGHQによる闇市撤廃命令で規制されてから急速に消滅しており、後の若者の「派手なアロハシャツ」という風俗から、**本篇の作品内時間は昭和二〇年代初期の昭和二十二〜二十四年辺りの夏に設定出来るように思う。**

「モク拾い」後の「おばあさん」の作業と叙述から判るように、これは自分が吸うためのそれではなく、拾い集めて煙草の葉を取り出し、それを紙で丸めて、また一本の煙草に再生し、それを路上で売るのである。専売で統制品であった煙草は敗戦後の数年は極端な品不足に陥っており、街中や駅構内での吸い殻ポイ捨ては常識であった（私は昭和三二（一九五七）年生まれであるが、物心ついた頃の記憶の中に、昭和三〇年代の国電（山手線）の駅ホームの線路が吸い殻で雪のように真っ白だったことに驚いた思い出が残る）。しかもこの昭和二十年代の煙草の殆んどはフィルターなしの両切りで、吸い殻には煙草の葉そのものが指で摘まめる分ほどには有意に残っていたのである。

「信玄袋」布製の平底の手提げ袋であるが、口を紐で締められるようにしたものの特に指す。明治中期以降から流行し、和装の女性が小物入れなどに使う。普通に私もかく呼んでいるが、何故、「信玄」なのかは実は不詳らしい（「大辞泉」に拠る）。

「鯨が出盛りになる」戦後に急速に拡大発達した日本の商業捕鯨に於いて、当時、食用として捕獲された主対象は、現生種は勿論、中生代に繁栄した水陸の巨大恐竜類などの絶滅種も含め、地上史上最大の動物種である大型のシロナガスクジラ（哺乳綱鯨偶蹄（クジラ）目ヒゲクジラ亜目ナガスクジラ科ナガスクジラ属シロナガスクジラ *Balaenoptera musculus*。体長は二〇〜三四メートル（記録上の最大長）・体重八〇〜一九〇トン）やナガスクジラ（ナガスクジラ属ナガスクジラ *Balaenoptera physalus*。体長二〇〜二六メートル・体重三〇〜八〇トン）であった。「出盛り」とは旬のことのようにも読めるが（例えば小型の鯨であるイルカ類は本邦では冬とされて冬の季語ともなっている。確かに私がしばしば訪ねた伊東の古い魚屋（既に廃業）には夏になると店頭に鮮やかな紅色の海豚肉が並んだものだった）、しかしこれは寧ろ、**冷凍技術レベルの低い捕鯨船団が日本へ帰投し、冷蔵流通が困難な状況下で、ともかくも鯨肉が傷んでしまつて商品にならなくなる前に安く売り捌かねばならない時期を指し、それを買う側から現象として見た時に「出盛りになる」時期と称している、と**考えるのが自然なように私には思われる。そして先にも示した登場する若者の風体が「派手なアロハシャツ」というのに着目すれば、**やはりこの作品内の季節は夏と考えてよい。**因みに、当時の捕鯨の技術的發展はウイキの「日本の捕鯨」その他によれば、昭和二六（一九五二）年に「平頭銛（へいとうもり）」（七十五ミリ捕鯨砲）が開発されたことや魚群探知機の導入などがあるとあつて、『先端が平らな平頭銛は水中での直進性に優れ、浅い角度で命中した時の跳弾も少ない銛で』あつたが、これは実は『日本海軍が開発した九一式徹甲弾の技術が応用されていた』とある。「九一式徹甲弾」は、今も昔も世界最大である日本海軍の大和型戦艦群に搭載された遠距離砲撃戦用大型特殊弾の一つで、水中弾効果を高める形状設計で、海中に突入後は急激に水平方向に向きを変え、魚雷のように敵艦水線下に突き進んで敵艦の喫水下を破砕するという特殊徹甲弾である。

「切符を買つて歩廊に入ると」「歩廊」は「ほろう」で駅のプラット・ホームのこと。動きの鈍い「おじいさん」は同業の連中とは街路では恐らく太刀打ち出来ないのに違いない。だから、わざわざ金を払つても駅入場券を買つて構内へ行くのだ。ホームは狭く、しかも電車が着けば、喫煙していた者は即座にそこを去りたい吸つていなくても煙草を足元に投げ棄てるから、「モク拾い」としては意外な穴場なのではないか。そうしてそれなりのモクの収穫量に達すれば、「おばあさん」がそれを再生して売る額は、この駅の入場料の金額を相応に越える有意な額となるのであろうことも想像出来る。

「糊屋」「のりや」。障子の張り替えや着物の洗い張りに使うための糊を売っている店のことであるが、最早見かけぬ商店である。私も実際には見たことがない。

「二尺」六十一センチメートル弱。

*

（ここで以下の同日内（昼過ぎから夜）シークエンスの描写をよく記憶されたい（下線はやぶちゃん）。

「やせたぶち猫」

「夕方になっておじいさんはとぼとぼと家に戻ってきた。暗い空からは、今にも雨が落ちてきそうであった」

「やがて夕食が終えたころ、屋根の上で雨のおどがぼつりぼつりと鳴った。そしてそれはだんだんひどくなった」

「へんな猫に鯨肉を半分も食われたことを、まだおばあさんは腹を立てているのであった。しかし火吹竹で猫の横面を力いっぱいなぐりつけたとき、猫がよろめきながら、燃えるようになかない眼付をしたことを思いたすと、やはりおばあさんの胸にも物悲しい気持がひろがってきた」 「やぶちゃん注：「横面」は「よこつら」と読む。」

「窓のそとを、ときどき青白く稲妻がはしった」

そうして、次の「猫の話」をお読み戴きたいのである。或いは既に「猫の話」を読んでい
る方は思い出して戴きたいのである（下線太字はやぶちゃん）。

——「猫の話」の「カロ」は「茶色ぶち」である。

「カロ」が轢かれた日の夕刻から夜に到るシークエンスを御覧戴きたい。

——「その夜」「外では雨が降ってきたらしく、板廂をはじく水音が聞え、遠く近くで雷の音がごろごろと鳴った。前の大通りを、自動車が水をはねて疾走してゆく音が、ときどき聞えた」

この掌篇「いなびかり」の「雨」と「稲妻」は「猫の話」のあの「雨」と「雷」である。

そして何より（下線やぶちゃん） ——

——この「いなびかり」で「鯨肉を半分も」盗み食いしているところを見つけられ、「火吹竹で」「横面を力いっぱいなぐりつけ」られて、「よろめきながら、燃えるようになかない

眼付をした」「やせたぶち猫」とは――

――「猫の話」で「ものを盗んでいるところを見付けられ、どこかをしたたか殴られたにちがいない」「カロ」であり――

――「向う側の横町から」「なにかへんにぶらぶらした歩きかたで、いつものような確かさがなく」「頸をしきりに曲げるようにしながら、ひよろひよるとよろめいて、大通りを横切ろうとした」「カロ」である――

という驚くべき哀しい事実なのである。そうしてまた（太字やぶちゃん）――

――この「いなびかり」で、おばあさんのその「胸に」「物悲しい気持がひろがってきた」事実が――またしても我々の胸を激しく打つ――

のである。」

猫の話

大通りに面した運送屋の二階を借りて、若者と一匹の猫が住んでいた。

この猫は、ある日とつぜん、彼の部屋にやってきた。どこからともなく板廂いたびきしをつたって、彼の部屋に入ってきたのであった。そのまま猫は彼の部屋に居ついた。彼も孤独であったから、なんとなくこの猫に愛着をかんじるようになった。

猫の皮は、茶色のぶちで、耳たぶがうすく鋭く立っていた。身体のうちが、しなやかにくぼんでいて、尻尾はながく垂れていた。

それまでひどい生活をしていたと見えて、猫はすっかりやせていた。眼だけが大きく澄んでひかっていた。彼は外食券食堂にゆくたびに、食べのこした魚の骨やパンの耳を、紙につつんで持ってかえた。猫はそれを待ちかねて食べた。そのほかに自分で、部屋にやってくるカナブンブンや蠅はえをとらえて食べたりした。猫がいちばん好きだったのは、蟋蟀こむぎであった。運送屋のとなりが空地であったので、そこから蟋蟀が何匹も入ってくるのであった。

蟋蟀が部屋に入ってくると、猫は急にしんけんな眼付になって、畳の上にひらくなり、蟋蟀の姿をねらった。その姿勢はなにか力にみちていて、眺めていると、自分が蟋蟀をねらっているような錯覚に彼はおちた。猫がぱつと飛びあがると、かならずその蟋蟀は猫の口にくわえられていた。猫はそれからばりばりと蟋蟀を齧み、触角だけを残して、他はみな食べてしまうのであった。

彼の部屋には、だからあちこちに、細い剣のような触角がたたみの上にちらばっていた。それが足の裏にざらざらふれるたびに、彼は次のような句を思い出した。

蟋蟀在堂 歳聿其莫

それはむかし、伯父さんから習った文句であった。意味はわからなかったけれども、彼は何とはなく、これを記憶していた。その他伯父さんから、いろいろなことを習ったが、覚えているのはこれだけであった。あとのことは、すべて忘れていた。

夜になると、猫は彼に身体をすりよせて寝た。そのしなやかな皮のしたに、彼はかぼそい猫の骨格をかんじた。もつというんなものを食わせて、肥らしてやりたいと思ったが、貧乏でそれも出来ないのであった。食堂から魚の骨をつつんでかえるのが精いっぱいであった。

昼間、ときどき猫はどこかへ出かけて行った。しばらくしてかえってくると、おなが

ふくらんでいて、ぐったり横になり、舌で顎の辺を舐め廻したりした。どこかに行つて、何かを食べて来るにちがひなかった。そんな時は蟋蟀がそばまできても、あまり見向きもしなかった。

「何を食べてきたんだい。おまえは」

彼はよく指先で、やわらかい脇腹をぐりぐりとつついてやったりした。いまどきよその猫に食物をあたえる家もないだろうから、どこかの台所でぬすんで食っているにちがひないと思つたが、彼にはそれを叱るすべもないのであつた。

「ぬすむのもいいけれど、見つからないようにしろよ」

彼はこの猫にカロという名をつけてやつた。意味もない名前であつた。それから三箇月ほど過ぎた。

ある曇つた日、彼が窓から大通りを見おろしていると、向う側の横町から、カロが出てきた。なにかへんにふらふらした歩きかたで、いつものような確かさがなかつた。頸をしきりに曲げるようにしながら、ひよろひよるとよるめいて、大通りを横切ろうとした。切迫した予感が背をはしつて、彼は窓べりをにぎりしめたまま、身体を思はずのり出した。そのとたん、右手の方から走つてきた黒い自動車があつというまに視野に入ると、茶色のカロの姿は、ひよろひよるとその車輪のしたに吸い込まれた。

頭のなかが燃え上るような気持で、彼はそれを瞬間に見た。カロの身体がぐしゃつとつぶれる音を、彼はその時全身でありありと感じとつた。自動車はちよつと速力をゆるめたが、すぐにスピードを増して左手の方へ小さくなって行つた。暗い空のした、ひろい車道のまんなかに、カロのつぶれた死骸だけがぼろ布のようにころがっていた。それを一目見たとき、彼は大声でわめき出したい衝動をこらえながら、眼を大きく見開いて、指をがくがくと慄えさせていた。

その夜、彼は蒲団にもぐつて、長いこと泣いた。カロをこんなに愛していたとは、今まで意識しないことであつた。こみあげてくる涙のなかに、生きているカロのいろんな姿体がかんできて、彼はなおのこと泣いた。外では雨が降ってきたらしく、板廂をはじく水音が聞え、遠く近くで雷の音がごろごろと鳴つた。前の大通りを、自動車が水をはねて疾走してゆく音が、ときどき聞えた。

翌朝になると、雨はあがっていた。彼は寝巻のまま、はれぼったい臉の下から、乾いた眼で大通りを見おろした。濡れてだだっぴろい車道のまんなかに、カロの死骸があつた。やはり夢ではなかつた。それは昨夜なんども自動車のタイヤにひかれたと見えて、板のようにならなくなって、舗道にひらく貼りついていて、猫の身体のかたちのまま、面積は生きておるときの五倍にもひろがっていた。彼は急に無惨な気がして、また涙が流れ

出そうな気がした。そしてあわてて、窓からはなれた。

大通りを、一日中何十台何百台ともしれぬ自動車が行来した。彼は一日中部屋にいて、その音を聞いていた。

翌日は日が照って、道が乾いた。道が乾くのといっしょに、カロの死骸も乾いた。乾いてみると、それは猫の死骸という感じではなくて、猫の形をしたよごれた厚紙のような感じであった。そしてそれは舗道に貼りついてはいたが、四囲の部分が疾走するタイヤの圧力で少しめくられ、ひらひらと動いていた。その上を容赦なく、いろんな型の自動車やトラックが通った。彼はそれを窓から見おろしていた。

彼はその日一日中、カロのことをぼんやり考えていた。蟋蟀こおろぎをねらうカロの姿とか、蒲団にねむっているカロの格好だとか、彼の着物の裾にじゃれつくカロの感触などが、なまなましく彼によみがえってきた。そのカロがすでに実体をうしなつて、あそこによごれた紙みたいになつて拵がつていることを思うと、胸をかきむしりたくなるような悲哀感が彼をおそののであつた。あの横町から出てきたとき、どうも歩き方がおかしいと思つたが、ものを盗んでいるところを見付けられ、どこかをしたたか殴られたにちがいない、と彼は思つた。そうすると彼は新しく涙が垂れた。

そしてまた翌日になつた。彼が窓から通りを見おろすと、カロの死骸の感じがすこし変わったように見えた。彼は眼をこらして、しばらくじつと眺めた。確かに昨日より、形が小さくなつたような感じであつた。彼が見ている前で、その時また一台のトラックがカロの上を通りぬけた。その反動でカロの死骸がすこし動いたような気がしたが、はっと気がつくつと、死骸の縁のささくれだつた一部を、たしかに今のタイヤがくつつけて持つて行つたにちがいがなかつた。

彼は身体のなかから、何か引きぬかれるような感じがして、凝然と立ちすくんだ。

カロの死骸が、乾くにつれて風化して、皮も骨も内臓もぼろぼろの物質になり、四囲のめくれた部分からすこしずつ、車輪がすすめてゆくに相違なかつた。一廻り小さくなつたところを見ると、昨日から相当量、千切つて持ち去られたにきまつていた。そう思うと彼は、何か言いようのない深いかなしみが、胸にひろがつてくるのを感じた。

彼はその日、窓辺に椅子をおいて、一日中通りを見張っていた。カロの死骸をかすめてゆく自動車がいるのを、どうしても放つておけない気持がするのであつた。そうして昼の間、何十台という自動車が、カロの上を通つた。それは恰好のいい乗用車もあつたし、がたがたのトラックもあつたし、またオートバイや、まれに靈柩車れいきゆうしゃが、カロの部分すすこしずつ持つて逃げた。そのたびに、彼は両掌で眼をおおつた。

夕方になると、カロは半分になつていた。

次の日も、彼は朝から、窓辺の見張りをつづけていた。カロの死骸はすでに猫の形をうしなつて、一尺四方ぐらいの、白茶けたぼろに過ぎなかった。しかし彼は昨日から、ずっと見張っているせいで、それがカロのどの部分であるかは、はっきりと知っていた。

この日もさまざまな自動車が、カロの上を通った。道が乾き切ったので、カロの死骸も貼りついている支えを失ったのか、今日はことに脆く持ち去られるようであった。顔の部分はまだ残っていたが、昼ごろ炭俵を積んだトラックがきて、両方の耳を一挙に持つて逃げた。彼はあの薄いするどい耳たぶの形を思い出して、声を出してうめいた。

黄昏のいろが立ちこめてきた頃、カロはすでに手帳ほどの大きさになっていた。それは最後までのことたカロの顔の部分であった。彼は異様な緊張を継続しながら、黄昏れかかった通りを見張っていた。

通りのかなたから自動車の影をみとめるたびに、彼は身をかたくした。そしてその車輪がカロにふれないように、必死に祈願した。

しかしついに、最後にカロを持ち去られる瞬間がきた。それはぼろぼろのタクシーらしく、ななめに揺れながらごとごと走ってきたのであった。ちらと見た印象では、なかに中年の男たちが五六人、ぎっしりと詰めて乗っていて、それがみんな酔っぱらっているらしかった。窓から手が出たり入ったりした。まるで自動車自体が酔っぱらっているような具合であった。その後尾のタイヤが、あつという間もなく、カロの顔をペロりとすくいあげたと思うと、がたごと軋みながら、その酔っぱらい自動車は一目散に遠ざかって行った。

彼は窓からはなれ、部屋のまんなかにくずれるように坐りこんだ。そうして両掌を顔にあて、しずかな声で泣いた。カロがすっかり行ってしまったことが、深い実感として彼におちたのであった。カロの死骸が、いまや数百片に分割され、タイヤにそれぞれ附着して、東京中をかけめぐっていると考えたとき、彼はさらに声をたかめて泣いた。

カロがいなくなつて四日になるから、蟋蟀が何匹も床の間や壁のすみに、安心してとまっていた。本箱のかげにいたその一匹が、その時触角をかすかに慄わせながら、畳の上にはい出してきた。そしていい音を出して一声高く鳴いた。

「やぶちゃん注…本篇については、私の『梅崎春生「猫の話」語注及び授業案 藪野直史』をお読み戴きたい。」

午 砲

叔父さんは岬みさきの一軒家に、ひとりぼっちで住んでいた。日曜毎に少年は岬へあそびに行った。

昔むかしのしげった草丘のかげに、叔父さんの家はひっそりと建っていた。屋根板がひくくかたむいていて、家というより小屋という感じにちかかった。少年が行くと、いつも叔父さんは部屋のなかで、ぼんやり寝ころんでいるか、起きて本をよんでいるかしていた。部屋にいないときは、海の方へおりてゆくと、大きな岩のかげでつり糸をたれていた。

叔父さんは背がたかく、大きな掌をもっていた。広い額がすこしおでこになっていて、灰色がかった黒眼がその下にあった。叔父さんの眼はいつもどんよりしていて、遠くを見ているのか、近くを見ているのか、すこしも判らなかつた。おでこでかげになるせいだろうと、少年は心できめていた。

岩かげでは、ハゼやドンコが釣れた。叔父さんから竿を借りて、少年はそれを釣ったり、草原の上で宿題の写生をしたりした。写生をしていると、叔父さんがこっそりやってきて、しばらくうしろで眺めたりした。

「海はそんな色かね。そんな色じゃないだろう。もっと黒くてきたない色だよ」

そんなことを叔父さんは言うことがあつた。そして自分でクレヨンをとって、少年の絵を塗りなおしたりした。

「あの樹は、そら、こんな色じゃないよ。よく見てごらん。幹だって、ウンコ色だよ」

叔父さんが手を入れて修正すると、色はいつもきたならしくなつて、学校へ出すのも恥かしいような絵になつた。だから少年は家へかえつて、同じ絵をあたらしく書かねばならなかつた。絵を直されるのは迷惑だつたけれども、少年はこのような叔父さんが好きであつた。

岬は腸詰のような形で無雑作に、青黒い海にのびていた。その岬のつけねから、ぼつぼつ家並が始まり、湾曲した海岸線にそつて、小さな市街がひろがっていた。だから岬の尖端からみると、抱きこまれた海のむこうに、灰色の市街がよこたわっていた。叔父さんの役目、この岬で午砲を撃つことであつた。正午になると砲声が、半里の海をわたつて、市街にひびいてきた。すると貧しい市街にすむ人々は、時計の針をなおして十二時に合わせた。

叔父さんはまったくひとりぼっちで住んでいた。叔父さんの部屋には、すすけた吊りランプがかかり、畳は潮風に赤茶けていた。こんなところにひとりで住んでいて、淋しくないかしらと少年は思つた。そしてそう訊ねてみた。

「淋しくはないさ」と叔父さんはすぐにこたえた。しかしそう答えたときの叔父さんの姿は、なにか影のように黒くひらく見えた。だから少年はかさねて言葉をついだ。

「叔父さんは退屈しないの？」

「退屈はしないさ」叔父さんはすぐにそう答えて、大きな掌を少年の頭においた。「退屈しているのはお前だろう。ハゼ釣りにつれてつてやろうか」

叔父さんはいろんなことを少年に教えて呉れた。岬に生えている草の名や、鳥や虫の名を叔父さんは指さして教えた。それから部屋のなかで、机につんだ本をひろげて、一部分を読んで聞かせたり、わかりやすく説明して呉れたりした。叔父さんの机の上には、きちんと折りたたんだネルの布に、古風な大きな懐中時計が置いてあった。その竜頭は茸きのこのような形をしていた。叔父さんの声は、近くで話しているくせに、遠くから聞えてくるような響きをもっていた。

ある日曜日、叔父さんとハゼを釣っていたとき、少年は足をすべらせて、岩角でくるぶしを切った。血がたくさん出て、半泣きになっていると、叔父さんは岩の上から、へんに真面目な声になって言った。

「海の水につけるんだ。早く降りてつけなさい」

少年が降りてゆくのと一緒に、叔父さんも岩を降りてきた。片足をつめた水につっこむと、傷口にじんとしみて、鮮紅色の血がゆらゆらと水に溶けた。岩角に手をかけて、少年は痛みをこらえて、じつとそれを見つめていた。頭の上から叔父さんの声がした。

「そら。きれいだろ」

血が紅い煙のように、揺れながらぼやけていた。そして傷口からまた赤い血が、淡青の水の色にふき出していた。叔父さんは身体を曲げるようにして、それを灰色の眼でじつと眺めていた。少年は俄かに、恐いようなかなしいような気特になって、半分泣き声でさげんだ。

「まだ入れとくの。まだ？」

叔父さんはその声をきくと、急にやさしい顔になって、少年を抱きあげた。用心しながら岩へ上って、小屋まで抱いたまま歩いて行った。そして薬を戸棚から出して、ていねいに繃帯ほうたいをしてくれた。

普通の曜日は、少年は市街にある小学校で午砲の声をきいた。遠くから午砲がひびいてくると、学校の鐘が鳴って、お弁当の時間になるのであった。だから皆はこの午砲のおとをたのしみにしていたが、少年はその時叔父さんを強く思いだし、なにか身体があたたかくなるような、淋しいような気特になった。皆はただ音をきくだけで、それを打つ人のことを何故かんがえないのだろうと、少年はぼんやり思うのであった。

日曜の正午になると、少年は叔父さんが打つ午砲の音をすぐ近くで聞いているわけであった。近くで聞く午砲のおとは、遠くで聞くおととまるでちがつていた。

十二時すこし前になると、叔父さんは机の上の大きな懐中時計をわしつかみにして、芒すすきの道をぬけて岬の突端へいそいだ。少年もおくれないように、叔父さんのあとにつづいた。

大砲は岬の尖端の見晴しのいいところにあつた。仮小屋のなかに入っていて、砲口は市街の方にむいていた。青黒い砲身はずんぐりと短く、元のところにローマ字がちいさくぐるりと彫られていた。

叔父さんは砲身の栓をぬいて、火薬やぼろ片や藁をいっしよに押しこめた。そしてしばらく身構えて、手にした時計の秒針をにらみつけていた。

海をへだてた彼方には、今日も市街が灰色に沈んでいた。ところどころに煙突がたち、煙が幾筋かでていた。港のところろに帆柱がちいさく並んでいるのが見え、海の上に帆船がゆったりと浮んでいた。あたりはしんとしていて、何の物音もしなかった。少年はいつも、身体が内側からふくれ出すような気特になりながら、発射の瞬間を待つのであつた。時計をにらむ叔父さんの表情は、平常の顔とはまるで違つていた。そんな叔父さんの顔を、少年は痛いような好奇心で見つめていた。そして少年は、こんな表情をときどき大人がつくことをよく知っていた。受持の先生が便所でおしっこしているときの顔や、お医者さまが注射をするときの顔を、少年はすぐ聯想した。しかし叔父さんの顔は、それともどこかちがつているような気もした。

叔父さんの身体がぱつと動くと、そこだけ空気がすぼつと抜けるような、途方もない大きな音がした。反響もなにもない、からっぽで、そのくせ耳がんとするような烈しい音響であつた。二三秒間は身体のなかがすっかり空虚になつて、すべてのものが停止するような気がした。このじんとしびれるような二三秒間を味わうことが、少年はもっともおそろしかつたし、それ故にまた、もっとも待たれるのであつた。叔父さんもこれがたのしみで、毎日打っているのかも知れないと、少年はときどき考えた。

煙硝のにおいのする茶色の煙が、潮風に散つてしまうと、少年は叔父さんによりそうようにして、道に戻つて行つた。そして少年はいつも同じことを叔父さんに問いただそうとするのであつた。

「いまの音、お父さんやお母さんにも聞えたかなあ。どうも聞えないような気がして、仕方がないの」

すると叔父さんはいつも、ぼんやりしたような笑いをうかべて、大きな掌を少年の頭へのせた。

「やぶちゃん注…本作は、一九七〇年代後半から一九八〇年代初めにかけて、中学校の国

語教科書に採られていたようである。「猫の話」を教授された当時の高校生の一部が梅崎春生の名を聴いて『「どん」だ！』『「どん」だ！』と騒いでいたのを覚えている。

「午砲」梅崎春生は一切ルビを振っていないが、一般に通称される「どん」で当て読みしておく。無論、本来は午砲（ごほう）で、時を知らせるために撃たれる空砲の大砲を言い、本邦では歴史的に正午に撃つことが多かったことから、正午の砲、「午砲」と称された。以下、[ウイキの「午砲」](#)から引く。『日本では江戸時代末期に行われていたという記録も散見されるが、組織化されたきっかけは』明治四（一八七二）年の『午砲の制により制度化されたことによる。大都市を中心に、午砲台（所）が設置された』。『運営は主に陸軍が行ったが後に海軍や測候所、地方自治体も参画している』。「叔父さん」が民間人であってもおかしくないわけである）。午砲が撃たれる場所午砲台と呼ばれた。この明治四年、『兵部省で「真時正刻は胸臆手記することがはなはだむつかしい」という理由で東京の午砲執行を計画した。すなわち「旧本丸中に於て、昼十二時大砲一発ずつ毎日時号砲執行致し且つ諸官員より府下遠近の人民に至るまで普く時刻の正当を知り易くし以て各所持する時計も正信を取る所これあり候よう致し度、云々」という伺書を兵部省より太政官に提出したところ太政官においてもその必要をみとめ』、『執行させることとなった。すなわち皇城内中央气象台の隣地練兵場に正午所をもうけ、天文台から電信の打ち合わせでその日打ち出した大砲の号砲のひびきは俗に「丸内のドン」を午砲の代名詞とした。発砲は近衛砲兵におこなわせ』。下士一名、上等兵二名『来所の定めで、東京のほかにも師団所在地で執行された。その後、陸軍省の予算の収縮の結果』、[大正一（一九一二）年九月十五日限りで『これを廃するのやむなきにいたった。東京では東京市でその事業をひきつぎ』、昭和四（一九二九）年五月一日に『電話による正時の通報を得てモーターサイレンによる正時の通報が執行されるまでの号砲機関とした』](#)。明治二二（一八八八）年一月一日に『日本標準時が適用される際、神奈川県では当日午0時に野毛山で号砲を発した』。『午砲台の場所が高台にある都市ではしばしばドン山と命名され、現在でも呼び名が受け継がれている』（下線やぶちゃん）。以上の下線部と、高松の香川洋二氏の個人サイト内の[こちらの記載](#)によると、『戦後国内での「ドン」は大阪城天守閣復興60周年記念に撃たただけ』あるとあり（大阪城天守閣復興六十周年記念は一九九一年のことと推定される）、[（この「叔父さん」が「ドン」を打つ異常、これは本篇の作中の時制が戦中でも戦後でもない、戦前のことを意味するとしか考えられない](#)。全篇が平和な雰囲気であまり、おぞましい軍靴の音は聴こえてこない。かといって少年は絵をクレヨンで描いており、明治時代ではなく、[大正から昭和初期を作品内時代と取り敢えず想起出来るように私には思われる](#)。

「叔父さん」無論、これは一般的な成人男性或いは中年男性を指す「おじさん」とも読め、

赤の他人乍ら、寡黙でちよつと不思議なこの天涯孤独な感じの「おじさん」がひどく親しくなるというのも少しもおかしくはない。しかし一方、実際の少年の父母孰れかの親族としての「叔父」で、何故か、こんな岬の一軒屋に世を厭うように離れて住み、ただ「どん」を打つことを仕事としている（但し、実際にこの人物が「どん」を打つ以外に仕事を持っていないかどうかは、少年の目からしか描かれぬ以上、断定は出来ない）と読んでも何ら、不自然ではない。孰れにしても、確かに「不思議なおじさん」ではある。

「ハゼ」条鱗綱棘鱗上目スズキ目ハゼ亜目 *Gobioidei* 魚類群の総称。二千百種以上が汎世界的に淡水域・汽水域・浅海水域のあらゆる環境に生息し、もつとも繁栄している魚類の一つで、都市部の河川や海岸にも多く棲息し、多くの人々にとって身近な魚に挙げられ（こゝまではウイキの「ハゼ」に拠る）、釣り魚としては面白く鯊釣りは昔から人気がある。但し、種によるが（次のドンコを参照）、食用としては小さく、それほど美味しいものではない。

「ドンコ」通常の標準和名のそれはハゼ亜目ドンコ科ドンコ属 *Odontobutis obscura* を指すが、本種は『流れが緩やかで底質が砂礫の、河川や湖、池沼、水田、用水路等に生息する。一生を淡水域で過ごす純淡水魚で』海には回遊しない（ウイキの「ドンコ」より引用）。少年は岬の岩礁帯でこれを釣っており、本種ではない。可能性としては「ドンコ」の異名を持ち、浅海域にも棲息するとなると、側棘鱗上目タラ目チゴダラ科チゴダラ属 *ソアイナメ Physiculus maximowiczi*・側棘鱗上目アシロ目アシロ亜目アシロ科イタチウオ属 *イタチウオ Brotula multibarata* であるが、どうもここで少年がハゼと一緒に狙う魚種としては私にはピンとこない。本篇のロケーションが不明で（作者梅崎春生の実体験に基づくとすれば生地の福岡博多か学生時代を過ごした熊本、戦中の鹿児島辺りが候補とはなる）、「ドンコ」と呼ぶ地方異名を現認し得ないものの、寧ろ、岬の岩場となると、私のイメージでは私も青年時代に岩場で幾らも釣ったことのある、スズキ目カジカ亜目アインメ科アインメ属アインメ *Hexagrammos otakii* が相応しいように思われる。なお、以上の魚類は孰れも食用となり、それぞれに美味しい。識者の御教授を乞う。

「岬は腸詰のような形で無雑作に、青黒い海にのびていた。その岬のつけねから、ぼつぼつ家並が始まり、湾曲した海岸線にそって、小さな市街がひろがっていた」不詳。モデルとなったロケ地はあるのだろうか？ 幾つかの午砲台跡を調べてみて、『これはもしかしたら「あそこ」がモデルではなからうか？』（軽々には言えないので場所は伏せるが、「腸詰のような形」の「岬」その岬のつけねから、ぼつぼつ家並が始まり、湾曲した海岸線にそって、小さな市街がひろがっていた」からはっと思つた。「そこ」だとすると、直感的には何か私には激しく腑に落ちたのであったのであるが）と思うものがあつたが、その午砲台は「岬」ではない。但し、春生の生地博多にも「どん」があり、それは「波奈（はな）

砲台」と呼ばれ、実に明治三一（一八九八）年から昭和六（一九三一）年まで鋼鉄砲が撃たれたということが、くま氏の個人ブログ「福岡博多の昔のお話」の「[石城](#)、[お台場](#)、[そしてドン（一）](#)」で確認出来た。位置を見ると、現在は港湾化されているものの、岬であったと思われ、しかも博多市街は海を隔てて約二キロ弱ある。本文には「半里の海をわたって、市街にひびいてきた」とあるのと一致するようにも思われる。同ページには大正六（一九一七）年度に交換したその『最終砲が福岡市博物館に現存』するとある。その砲身は「青黒」く「ずんぐりと短く、元のところはローマ字がちいさくぐるりと彫られてい

るだろうか？ 識者の御教授を乞うものである。

「竜頭」「りゅうず」。言わずもがなであるが、腕時計や懐中時計のネジを巻くためのつまみのことである。

「聯想」漢字表記はママ。連想に同じい。

「煙硝」「えんしょう」。火薬。

「叔父さんの身体がぱつと動くと、そこだけ空気がすぼつと抜けるような、途方もない大きな音がした。反響もなにもない、からっぽで、そのくせ耳がんとするような烈しい音響であった。二三秒間は身体のなかがすっかり空虚になって、すべてのものが停止するような気がした。このじんとしびれるような二三秒間を味わうことが、少年はもともとおそろしかったし、それ故にまた、もとも待たれるのであった」私はこの部分、「猫の話」の主人公がカロの轢断の瞬間に感ずる「頭のなかが燃え上るような気持で、彼はそれを瞬間に見た。カロの身体がぐしゃつとつぶれる音を、彼はその時全身でありありと感じとった」というシーン、カロの平たくのされた身体が千切られ、筆られて持ち去られるということに気づいた時の、「彼は身体のなから、何か引きぬかれるような感じがして、凝然と立ちすくんだ」という身体感覚との相似性を遠く感じている。

*

この「叔父さんはまったくひとりぼっちで住んでい」る。「こんなところにひとり住んでいて、淋しくないかしらと少年」が思うほどに粗末な淋しい小屋である。しかし叔父さんは「淋しくないさ」と答えるのであった。「しかしそう答えたときの叔父さんの姿は、なにか影のように黒くひらたく見えた」と描写する（下線やぶちゃん）。

これらの表現は、既に前篇の「猫の話」を読んだ読者にとっては、かの「孤独」で「淋しい主人公の「若者」、そして、かの轢かれて、のされて」「ひらたく」されてゆく「若者」と同じく「孤独」であった猫「カロ」の衝撃的な映像を、これ、直ちに「聯想」させるものではある。少なくともそういう直覚的連想を明らかに強いる確信的表現ではある。

しかし、では、

——この「叔父さん」は、あのかつての「若者」なのだろうか？

いざ。違う。「午砲」の注で解析したように、

——本篇は前の戦後の昭和初期の二篇の時間から巻き戻された戦前であり

——その前二篇とは異なった時空間

——すこぶる平和で静かな原風景の羊水の中にいる過去時制の少年の原体験

——としか読めない。さて、そう考える時、私は、

「叔父さんはいろんなことを少年に教えて呉れた。岬に生えている草の名や、鳥や虫の名を叔父さんは指さして教えた。それから部屋のかなで、机につんだ本をひろげて、一部分を読んで聞かせたり、わかりやすく説明して呉れたりした」

——という箇所に戻ってゆく。

この「伯父さん」は、まさに前篇「猫の話」で、主人公の「若者」に、

蟋蟀在堂 歳聿其莫

——という、

——「生」の儂さ、空しさを孕んだ「詩経」の詩篇の一節を覚えてくれた「伯父さん」ではなからうか？

「猫の話」の「若者」は言う（下線やぶちゃん）、

「それはむかし、伯父さんから習った文句であった。意味はわからなかったけれども、彼は何とはなく、これを記憶していた。その他伯父さんから、いろいろなことを習ったが、覚えてるのはこれだけであった。あとのことは、すべて忘れていた」

「叔父さん」（「午砲」）と「伯父さん」（「猫の話」）の違いなど、最早、問題ではない。寧ろ、

春生はそうしたあからさまな連関描写を嫌ったに違いない。既に確信犯で、それは第一篇(いなびかり)と第二篇(猫の話)に同じ猫「カロ」を登場させるといふ明確なスピン・オフ演出に於いて充分にやり尽くしている。それ以上やるのは、如何にも臭くなるからである。

さればこそ、

——この「午砲」の主人公である幸福な「死」(但し、それは海の水の中に広がってゆく血に恐ろしげに予兆されてある)も「孤独」も知らぬ天使のような「永遠の少年」フエル、エテルヌスは……

——その後

——戦禍によって父母親族一切を失い

——天涯「孤独」となって東京へ流れて来

——そこで邂逅したただ一人の盟友「カロ」をさえも理不尽に消滅させられ

——「死」と「孤独」ステイグマを聖痕として身体に刻み込まれてしまった

——「猫の話」の主人公の「若者」であったのである……

と私は読むのである——大方の御批判を俟つ——」